



戦乙女 ヴァルキリー

アリーヤ〜季の残月〜

原作 ルネ 小説 空蝉

表紙 田丸まこと 挿絵 三巷文

立ち読み版

登場人物紹介

Characters



アリーヤ

天界最強といわれる戦乙女。大神オーディンの命を受け、レイアを助けるため単身デュークのもとへ乗り込んできた。冷静かつ冷徹な性格だが、性的な経験は皆無。



レイア

デュークに囚われ、過酷な調教を受け続けている戦乙女。自分のことよりも人間を救うことを第一に考える傾向がある。

フェンリル

由緒ある血筋の魔族で、かつてデュークを監視していた魔族軍の将軍。今では、デュークに骨抜きにされ、色々と身の回りの世話を焼く。

フレイア

かつては天界の英知といわれた戦乙女だったが、デュークに調教され、現在は快樂のことしか考えられなくなっている。

デューク

魔王軍暗黒騎士団の長で、これまでに数々の戦乙女を調教してきた。人間と魔族のハーフで、それ故迫害されてきた過去を持つ。

——ぢゅ、ごツツ!! にゅぢゅぶぢゅぢゅぶぶ!

全身で浴びる牡どもの獣欲と、とどめを刺すべく牝穴を貫いた重たい一撃が最後の引き金となった。

「いぐっいっ……いぐうううううう!!」

ぶしゅッ……! ビクビクと痙攣する股間の中心。粘つく異形生物が敷き詰められた小さな肉穴の入り口で、悦楽の涙が噴き上がる。

ぬぢゅっぢゅぶぢゅぶぢゅっ!

呼応した粘性生物の暴動に膣口が挟りこまれるように押し潰され、ドロリと内部に侵食した冷たい媚成分に浸されて、牡汁を求める子宮がたまらず打ち震えた。

(子宮が、啼いてる。おちん、ちん欲しがつてる……)

びゅッ……! 雄々しい肉棒のフォルムを思い浮かべただけで、条件反射の如くヒクついた肉唇から、また勢いよく蜜汁がひとしぶき、噴き上がる。

「あくううっ……! こんな、こんなことお……」

強引に小さな絶頂に押し上げられ、緩んだ肉の扉がヒクリヒクリと牡の到来を待ちわびて蠢き続けていた。

「ふん。締まりのない穴だッ。汚らしい」

ゆっくりと女魔將の指が引き抜かれる間中、さざ波のように訪れる快楽の揺り返しで、戦乙女の腰は左右に卑しく揺さぶられる。

「なかなか昂奮したぞ、レイア」

「え……あ、いやあ……」

磔に処されたまま絶頂の余韻でへたれていた身体を、異形の汁にまみれた鎧装束ごと抱き締められた。

傷ついた心根に染み入るように、真っ直ぐ入りこんでくる男の瞳の輝きと、押しつけられた股間の熱さに、芯まで魅入られてしまいそうになる。

（だめ、だめ……。この人は敵。天に牙を剥く、危険な男。なのに、どうしてえっ……）

どうしてこんなに、胸が高鳴ってしまうのか——。虚ろな瞳はさ迷うように月夜を捉え、宿敵の腕に抱かれたまま。レイアは夜空に輝く新月の中心に、純白の羽を羽ばたかせる、人影を見た。

「……っ、何だこの、凄まじい殺気は」

「あそこだデューク！ 敵かつ……？」

次いでデューク、フェンリルが人影の方向を向く。現れた影は足首まである長い黒髪をなびかせ。黝の鎧兜を純白のドレスの上に纏った乙女はその手に携えた長槍を、寸分の狂いなく遠く離れたデュークの首に突きつけていた。

「あれは……神槍グングニル！」

「何!? では、あれが」

驚きの声を上げたレイアの声に、なおさらデュークが驚き、司令官の動揺が伝わったよ

うに処刑地を埋める兵士たちの間にざわめきが広がる。

「ええい、静まれ。……デューク！」

「ああ、わかつている。弓兵！」

飛来した新手。たった一人の戦乙女目掛け、デュークの号令で百近い大弓から矢が一斉に放たれた。だが、魔力をこめ増強されているはずの矢は、乙女の肌に触れることなく槍の一閃ですべてなぎ落とされる。

——タンッ。そして地に降り立った乙女の黒髪が夜風に舞う、その一瞬のうちに。

「ぐぎやあああああ！」「が、はっ……！」

黒髪の戦乙女の手を離れた神槍は、戦場を駆け抜け二十近い亜人の首をはねた。そのまま彼女の手に戻り、今度は間近に迫った暗黒騎士団兵士の腹を深々と貫く。

「引くな、憎き天界の戦士を見事討ちとってみせる！」

女魔将の檄を受け、彼女に心酔する黒騎士たちがこぞって戦乙女を包围する。

「死に急がずとも、貴様らはすべて冥府に送る。残月の戦乙女アリーヤが大神オーデインの御名の下にな」

敵を倒して喜びもせず、さも当然の結果と澄ました戦乙女が再び槍を振るえば、また、二十からの首が空に舞った。

「足止めがやつとか。……俺が率いる暗黒騎士団は、我らに魂を売った元人間で構成されている。くく……中にはお前目当てにきた者もいるようだぞ、レイア」

部下が殺されているというのに、なぜ笑みなど——非情な男をにらむと同時に、レイアの胸を別の感情が締めつける。

「そ、んな……」

目の前で、悪魔に魂を売ったとはいえ自身が愛した地上の民と同じ袂を持つ者たちが殺されていく。手を下しているのは、己と同じ戦乙女の名を持つ者で。

かつて大神の下にあった時には揺るぎなく思えていたレイアの正義への信頼が、男の言葉一つで音を立てひび割れていく。

「ふんっ……」

チャキイツ……。やすやす囲みを破り近づいてくるたった一人の敵に対し、ついにフェンリルが腰の剣に手をかける。

「フェン。構わん」

「し、しかしっ、ふあっデュ、デュークううっ」

だが、引き締まった腕で抱き寄せた男に唇を塞がれて、血気盛んな女魔将はすぐに彼の胸の中でおとなしくなった。デュークは何か企みがあるのか、まるで動じずに女魔将の唇と舌をねちっこく齧り続けている。

（あ、ああ……あんなに、優しいキス。私には……）

目前で、見せつけるように絡みあう舌同士はいやらしさに息を呑みこみ、はつとした。死中であつた自分を仲間が助けに来てくれたというのに、一体何を考えているのだ——と。

(敵であるデュークにキスして欲しいなんて……きつと調教を受けたせい。それで身体が勝手に疼いて……)

だが、自分を無理に納得させているような不快なわだかまりが胸の奥に残った。今しがたまで男に抱かれていた戦乙女の装束、蒼き鎧の輝きが目に染みる。

「邪魔だと言っている——はぁッ!」

アリーヤが冷たい、感情の揺らぎ一つない目でゴブリンやオーク、黒鎧の元人間たちを貫き、斬り伏せてゆく。

「さあフェン。仲間の前で再びレイアをイかせてやれ」

「くうんっ、わ、わかったから耳はっ、あふうっ……」

耳朶をなめられながら、ようやく息をついたフェンリルの手が再び汗濡れのレイアの股間へと伸びる。

(ま、た……!! それも仲間の前で、なんて……)

めくり上げられたままのスカートの下で、怯える心とは逆に肉ヒダがまとわりつく粘液を振り落としながら蠢動した。

「仲間にも見てもらうがいい。貴様がどれだけ恥知らずの牝犬なのかをな!」

言うが早いかフェンリルの両手が乙女の足枷をほどき。背後からレイアの両腿を抱きかかえ、まるで幼子に小便をさせているかのような姿勢を強要する。

「や、やめてフェンリルっ! こんな格好っ、ひ、酷すぎる、うううっ……」

戦場の仲間に、群がる男たちに、すぐ傍で薄笑みを浮かべる宿敵に。濡れた股間すべて丸見えの淫靡なポーズに、もじもじと尻が振れる。視線を浴びてちよろちよると、また欲張りな股間が甘い蜜を垂れこぼす。だがレイアには、恥じらう間すら与えられなかった。

ぶッ……ぐぶぢゅぶぶうううううううッッ!

「んひいつあつあぁッッ! おつ奥までつえええ!!」

脚を開いたことでぽっかりと入り口を広げた乙女の腔に、粘性生物が殺到する。たつぷりの蜜でぬかるんだ腔口は、たやすく、まるで牡を誘いこむように異形の身体を招き入れ

「そら、そおらっ! さつさと果ててしまえっ卑しいヴァルキリーめ!」

男の愛撫に身をよじりながら揺すり立てる女魔将の責めも加わり、食欲に粘液触手を呑みこんでしまう。

(あつああくうっ……中、擦れてっ、なのにいっ)

ヌルヌルの粘液を纏う異形の胴で肉粘膜を扱かれる。そんな乱雑な刺激すら切なく股間を痺れさせる。

不自由な体勢で身悶えるたび、粘液が染みてべったりと肌に張りつくドレスが、ズリズリと擦れて勃起乳首を甘苦しい痺れで惑わし続けていた。

ぬぢゅりゆるるっ……ずりゅ、ずるるううっ!

「んあはッ……あああおおお! おっ、なか、這いずってッ、いやっ、もおいやああ!」
蜜を溜めた腔内を、まさしく水を得た魚の如くスライム触手は蹂躪した。執拗に身をす

り寄せられ、べつとりと媚薬入りの粘液をすりこまれ。強制的に火照りを与えられた膣粘膜が、激しい吸引に悲鳴を上げながら、トロトロの蜜を染み出させる。

「だらしなくよだれまでこぼして……仲間が見ている前で辱めを受けるのがいいのか？」
「ふんっ、とんだ変態女神だ！」

男女の魔将が投げつけた辛らつな言葉に、はつと改めて周囲を見渡した。

「——ツツ！ み、見ないでアリーヤあ……あく、ひいアアツ……！」

立ち塞がる男たちを斬り伏せ、貫き、一直線に処刑台へと向かいながら。いなくなってしまう男たちの代わりに、真っ直ぐに鋭い戦乙女の眼光が囚われの乙女を射抜いてくる。

まるで不甲斐ない己を叱責されているようで。はしたないポーズを取り尻を振る己が心底から軽蔑されているようで——。

「い、いやあああああああ！」

レイアの胸はたちまち羞恥に染め抜かれていった。

仲間の厳しい視線を浴び、いたたまれなさと同時に被虐の悦楽を得てしまう。己の身体の浅ましさがどこまでも恨めしい。目を逸らすようにして見下ろした我が身は、鎧もドレスも戦乙女の証すべてが穢れた汁で汚れてしまっている。

「あ、あああつ、こ、これ、はっ……あうううっ……」

胸奥を爪でじかに搔かれたみたいに、痛痒さが芯まで響く。情けなさど屈辱にまみれるたび、レイアの勃起した乳首と汗濡れの股間を、鬱屈した甘い疼きが貫いていった。

ふあつ、ひいつくうううンツツ！」

雪のように白かった乳肌は緑の粘液と昂奮の火照りで彩られ。集中的に冷たい粘りに犯された勃起乳首が、たまらずうめくように激しく痙攣する。

脚震わせ、粗相をした子供のようにイヤイヤと身をよじるたび。女の芯が甘い疼きに脅かされるたび。物欲しげに震えた膣粘膜が衣装の粘液生物を包みこみ、膣穴全体で温かく迎え入れてしまう。

異形生物はまるで巨大なペニスのようにひと塊に凝り固まり、乙女の胎を我が物顔で占拠する。仲間に見られる被虐に怯えながら、宿敵を見つめ。肉体の快楽に引きずられるように、心までが禁忌への最後の一步を踏み越えようとしていた。

「あぐ、んひいいいっ！ 中でふっ膨れてえっ！」

蜜汁を吸った粘生物にびつちりと胎内を埋められたことで多幸福感を覚えてしまう肉体を心底惨めに思う。同時に底なしの被虐悦楽によって勃起した乳首と肉芽が、忙しなく甘い鼓動を轟かせ、乙女を享悦へといざなう。

(あ、ああつ、デュークうっ……デュークうう……)

行為の中止を願おうと魔将の顔を紅の瞳に映した途端。彼のたくましい肉槍に貫かれ、みつちり隙間なく腔内を埋められた時の、この上なく満たされた気持ちまで思い出してしまい、切なくなる。情けなさで慕情とが入り乱れ今にも泣きだしそうな瞳の中心に、魔将の皮肉めいた、彼らしい笑みが映りこみ。よけいに、泣きたくなつた。

「貴様ツ……！ 卑しい目で私のデュークを見るな！」

嫉妬に狂う女魔將の右手が膝裏から伸ばされた——そのことに身構える暇もなく。

ぎゅうつ！ ぎゅツぎゅうううううううツツ！

濡れそぼち、ぺつとりと左右に張りつく金色の茂み。その上部で卑猥に咲いた、赤く充血する肉の突起を、目一杯爪を立ててすり潰された。

「んぐううう!! ひっいいいいい！ そこおっ強すぎイイっ！ あっあぐうううう！」

恥骨ごと揺さぶる鋭すぎる衝撃に、腰の抜けた下半身がだらしなく震える。こみあげる尿意とも、絶頂の予兆ともつかぬ切なさにも両の脚はぴんとV字に反り返り、噛み締めた唇の隙間からは唾液と嗚咽が染み出すように漏れ続ける。なけなしの理性が、チリチリと悦楽の焔で焼き切れていった。

「素直になれと言っただろう……レイア」

「か、感じてなんかあ、はあん！ ああつ、はひい！ ひっ！ っいふうううううう！」

肉悦を拒絶し続ける乙女の心根をへし折るように、男の指示を受けた粘性ペニスが、まるで子宮を揉みほぐすみたいに執拗な圧迫を加えてくる。

ぐちゅ！ ぶちゅっ！ ぢゅごっ！ ぶぢゅぢゅぶぶうぶぢゅぶううツ！

「やああはアアアアア！ だっだめええっ！」

全身同時に与えられる快樂刺激に、もはや抗うことも拒むことすらできはしない。

「きっ、きもちいい、デュークのっ、いいのおっ！」

無理矢理に処女を散らされたはずの忌まわしき肉凶器に犯されている自分を夢想して、戦乙女の陰唇からまた大量の蜜がしぶき出た。

「ふんっ汚らわしい」

ずぶ濡れ状態の聖衣のスカートで、フェンリルが汁濡れた指先を器用に拭う。蔑みの視線にすら疼いた乳首が、身じろぎの瞬間布地と擦れてドクリと跳ねる。

「も、もおっ、いっ、いぐっいぐうううっ……。んぐう、デュークわたしいっ、いっ、いっちやいますううっ！」

ぢゅごっ！ ずぶぢゅ！ ぶしゅ！ ぢゅづるるッ！

無軌道な異形生物の抽送に、小突き上げられた子宮が身悶えながら収縮する。浮き足立つ乙女をつま先は、来るべき快樂衝動に身構え、強張っていく。

（なんてはしたないので、でも私い……。もう我慢できないっ、オマ○コっオマ○コが啼いてるのおお！）

垣間見た男の表情は征服者の色に満たされていて。

みっちり詰まる粘性ペニスが膣奥深くで蠢くたび、内側から押し広げられた産道全体が激しく揺れる。貫かれて服従の悦びに啼く子宮は卑しいよだれをたっぷりまぶして、離すまいと目一杯異形のスライムを締めつけた。

——ずぶっ、ぢゅッずごおおオオツツ！！

心の中で淫語を繰り返しささやいたのとほぼ同時に、締まる子宮口をこじ開けながら押



し上げた異形の一撃で、乙女の抵抗は儘く散った。

「んんつくうんんつ！ オッ、オマ○コおっ！ いっ……いぐうううううううう！！」
びゅるっ！ びよるるるるるるるるるるっ！

連続の絶頂で緩んだ肉ピラが、ヒクヒクと忙しく蠢き。M字に開いたまま限界まで突き出された乙女の股間が、溜めこんだ蜜汁を緑の異生物ごと高々噴き漏らした。

ぶしゅ！ びよるる！ ぶぢゅっ……びぢやびぢやびぢやあつ！

「あはははっ！ まるで子供だなヴァルキリー！」

（んは……あ！ は、ずかしい音おなかに響くう……うんち、漏らしてるみたい。んい、いくう……！）

まさに幼女が母親に小便を手伝ってもらおうように、女魔将の揺さぶりに合わせ卑猥な粘濁音と共にひりだされたゼリー状の複数の塊が、潤んだ肉ピラを抉る。そのたびに乙女の子宮は浅ましく吸いつくような動きを見せ。くねる腰の中心で、絶頂の証である潮を何度も噴く。

「あはあ……ああ……っひくうっ……また、いつちや、ううう……んんううっ！」

解放感一杯の心情を表すように、レイアの口元は緩みっぱなしで蕩けた声音を漏らし続けていた。

「くく、派手に噴いたなレイア？ お前自身のいやらしい汁で、戦乙女の鎧とドレスがぐしよぐしよだぞ」

「い、言わないでデュークう……んくう、ん……」

人前ではしたなく果ててしまった後悔や屈辱よりも、ただ身を震わせる甘い余韻が心地良。男女の魔将の蔑みと、遠く戦場から届く仲間の侮蔑の視線を浴びて、だらりと力の抜けた四肢が小刻みに揺れる。

十字の磔台に背中をもたれかけ、抱える女魔将をはねのける余力も、がくりと落ちた首を持ち直す気力もなく。見つめた己の胸元で、緑の体液でドロドロに穢れた鎧の輝きに、また鬱屈した被虐が舞い踊った。

「ふあつ、ああ……またつまたくるうつ、いくついきますう……っ！」

愉悦で潤む乙女の瞳が気だるく瞬き、だらしない口元をよだれがこぼれるたび。ドロドロと滑る異物を押し出すように、止め処なくレイアの股間を愛液が滴り落ちていった。

「……さて、勇敢なる戦乙女がここにたどり着くのも、時間の問題だな」

帯刀せずにいたことを悔やむでもなく、男は悠長に囚われの乙女の髪を梳く。

「デュークっ！ 今はそんな場合ではないだろう！」

抱えていたレイアを下ろし、次々斬り伏せられていく部下どもに檄を飛ばし。戦士の顔に戻り抜刀したフェンリルが、怒りに燃える瞳で恋人の真意を問う。

（お尻、冷たい……ああ、またきちゃう……）

うつとりと、へたりこんだ尻の谷間から再びくゆる愉悦の予兆に悶えた直後。男の意外な言葉が響いた。

「いひやあつ！ あぐ、またあ、またつ、イクツ、いいっ……ぐううううんツッ！」
 ぶびゆるっ……びゅ、びゅぶるっ……。

まるで腔にぶちこまれて押し出されたみたい、淫汁が一斉に皮淫具の中で噴き上がる。あつさりと、乙女は今日三度目の絶頂に押し上げられてしまった。

白粉まみれの肉棒を実際に受け入れた腸洞は、悦びに震えながら先刻までだらしなく広がっていた肛門をきつく窄め。染み出た腸液を牡幹に塗りつけては、ヌルつきとリズムカ
 ルな締めつけとで奉仕する。

全身に蓄積、蔓延した疲労を振り切つて尻肉が歡喜に飛び跳ね。張り裂けんばかりの嬌声
 が喉を突いて吐き出されていった。

「ヒクヒクうねって……くく、たまんねえぜえっ」

——ぢゅごんッ！

「んあぐっ！」

直腸の折れ曲がった部分——サイズの侵攻可能な一番奥まで肉棒を突き入れられて。眩暈と、頭痛にも似た、けれどどこまでも甘い肉の疼きを伴い、白熱の閃光がひっきりなく脳裏に焼きついた。

男は突き入れたきり腰を振るでもなく腸内のうねりを存分に味わい。ニタニタと薄気味悪い笑みを浮かべて、熱い吐息を首筋にかけてきたりする。

「ふっ、ふーっ……ネツチヨネチヨに犯してあげますからねえ、ええ？ 女神様アア」

ゆつくりと肉棒が引き抜かれてゆき。

「くあ、あ……く、屑が、ああッひいっ……！」

釣られて引つ張りだされた腸内の肉が、腹を空かせた餓鬼の如き食欲さで牡肉の傘裏に吸いつき、執拗に子種をねだり続ける。引き伸ばされた腹奥の粘膜からは茹つた分泌液が噴き漏れていった。

絶頂アツメに晒され続けるアリーヤの肛門は収縮を繰り返し、牡の勃起の熱にほだされています。まず熱心な締めつけを敢行する。

発汗して火照つた身体を汁濡れのドレスと鎧ごと抱きすくめられ。入り口近くまで抜けた亀頭でこねるみたいに肛門を掻き回され、また腹奥に堆積する切なさ甘い衝動とで、乙女はたちまち一匹の牝犬に変えられてしまう。

「はっひいイ……焦らず、なんてへええっ、つくうアア……あへッ、あおおう……っ」

くすぐられた肛門が、男を腹奥に引き戻そうと懸命に蠕動する。絶頂さなかの敏感な肉穴は悦ぶ亀頭のわずかな振動にも過剰な反応を示し、甘くいなきながら驚くほど多量の腸液を吐き漏らす。

「今度こそ俺のちんぽ、お手手で握ってもらいますよお女神様」「俺あ右手だ！」「じゃあ俺あ足裏な」

包囲網が狭まったことで一段と濃くプンとたぎる牡の生臭い香りは、戦乙女の誇りや責任感をまるごと呑みこみ、カス一つ残さず食い潰していった。

(暗、い……まだ、日が昇らないのか……?)

ふと上目遣いに見据えた路地の先に、一般市民たちが歩いていくのが垣間見えた気がする。けれどそれはあまりに一瞬で。弛緩したまなじりをこぼれる涙で霞む瞳では、確かめようもない。

「おら、手え出して下さい……よつと!」

にゆぢやあッ……。左右に手を引かれ、粉に突つ伏す頭よりも高い位置に掲げさせられた手のひらに、熱い欲望の飛沫が粘りつく。雄々しく脈打つ肉棒のたぎりに、自然と絡めた指に熱が入る。

「んはあ、く、臭いつ……。男の、お……おちんぼつ! こんなにたくさあん……んへあ
ああゝあん……んぐうう!」

一向に突かれることのない尻谷のもどかしさを埋めるように、これまで口にしたこともない淫猥な台詞が次々に吐き漏れていった。

(我慢、できないのお……臭いのつ、鼻にツンツンくる、男のにおい、ほ、欲しいい!)

両手のひらでやんわり包んだ肉棒を、ぎこちなく、徐々に粘る先走りを絡めて積極的
に扱き立ててゆく。

「や、柔らけえ手えつ」「腋のとこの、汗がにじんだドレスの擦れ具合もなかなか」「髪
の具合もいいぜえ」

膝の裏やドレスの裾、鎧の隙間。果ては黒髪を巻きつけて己が手で扱き倒す者。優に十

を越す肉棒のどれもが飢えに飢えて青筋浮かせ、鼻腔にこびりつくくらいに濃厚な牡臭さを絶えずぶちまけてくれた。

手のひらに感じる鼓動に合わせて手首にスナップを利かせ、刺激の度合いを変えてやるだけで、傘裏のくびれが激しく震えて甘い汁を噴き出してくれる。媚薬に狂わされた舌先でなめれば、どんな菓子よりも甘く感じられる牡の体液。

この上ない幸福が、全身に蔓延していった。

「んぶあつ、んあ、はあつ、ひっいいいいンン……!! おいひつ、おいひいろおお……
づぢゆるるるるるつ！」

女の幸せを噛み締めて、ドクン、と子宮が咽び泣く。拍子に汗ばむドレス生地に強かに擦れた両乳首が、ズクズクと悦楽の膿みを汗と共に吐き出していった。

(もつと濃いのおおっ！ 身体の芯まで痺れるくらいのが、欲しいイイツ)

吸いこみ続けた媚薬と、大波のように引いては繰り返し訪れる連続絶頂の衝動に、戦乙女は侵され、思考を奪われ。あとには性欲に忠実な牝犬としてのアリーヤ、ただそれだけが残った。膝がすり切れるのも構わずに下半身をくねらせ、快楽に陶醉した乙女が尻を振る。足鎧にすり傷がつくかも、と心の片隅でまだわずかに案じながら。

「く、くおらつ、暴れんじゃつ……おっおうおお!!」

散々焦らしてくれた男の肉凶器をひねりながら不規則にくすぐり、今度は逆に男の我慢切れを誘ってやる。同時にミチミチと粘りつく腸洞全体で、牡肉の熱と鼓動とを味わい、

思う存分アリーヤは甘い痺れに満たされていった。

（お、お尻の奥に熱いのがずぶうって……が、我慢できないイイツ、狂っちゃってるうっ！ 私ちんぽ……狂いにツツ！ いひやああああおとおお……!!）

「ちっ、ちきしょ……なんだこのケツ穴、中がうねって……ま、まるでマ○コにぶちこんでるみてえだッ」

生殖器と排泄穴でつながる男と女、たがいがたがいを焦らし、我慢比べをする。

「く、口でしてください女神様……ほれ、ほれえっ」

「んあ……む。はぶ、ちゅ……ちゅっ、ちゅるる、づちゅっ！ ちゅぼちゅぼおぢゅぼおおおっ！ んーっ、ぢゅツツッ！」

意識は完全に尻穴の肉棒へと取られ、ひたすらに牡の体臭に酔いながら。地面の粉をすくうようにまぶして鼻先に突きつけられた膝立ちの男の赤黒い肉槍の、甘く誘う臭気をも嗅ぎ尽くし。レロレロと汗の塩辛さを存分に味わい、絡んだ粉と一緒に垢をねぶり落としてやってから、ぱつくり開いた口腔へと招き入れる。

「おほっ！ すげ……へへ、魔族に仕込まれたテクってかア……舌がまるで蛇みてえにツ、うつくうう！」

「手の方も一段と熱心に……ッ。ようやく、淫乱の本領発揮ってかア！ うひいいいっ」

男たちの野太い嬌声に高鳴る胸の奥底で、熱く粘ついた欲情のマグマは堆積の限度を一気に飛び越え、汗と共に乳肌から滴り、こぼれ出ていく。

舌でねぶる玉袋の臭いとぬくもりに、ギユウギユウトリズミカルに震える尻穴の締めつけ間隔も自然と狭まっていった。

「ちっ、くしょお……！　もう我慢できるかッ！　突いてやる、女神のケツを突き殺してやつぞおらあ！」

媚薬効果で俊敏な振動を続ける腸粘膜に、肉棒全体をネットリと食まれ続け。我慢がきかなくなつた小太りの男が吠えながらペニスを猛らせる。

ぐぐつと腹の中で膨れ上がる牡の存在感に、アリーヤの口元が蕩然とほころび、蕩々の焦らしから解放される悦びに打ち震えて、ひと際肛門が窄まっていく。

ばんっ！　ぐぼぶ！　ぢゅぼぢゅぼぢゅぼぢゅぼッ！

「んひう！　んっ、あああぐううっ！　きたあっ……あああッくうううううんッ！！」

果てつばなしのアナルが、肉棒を強烈に締めつけたまま、ぬかるんだ腸全体を収縮させ、うねりを加え歓待の意を表明した。強引に腰を使って出し入れされる牡の、くぱりと開いた先端からも先走りのツユが吐き漏れて、腸内で攪拌され、牡牝の分泌液が混濁する。

硬いくせに弾力のある丸い切っ先で腸壁を打ち抜かれるたび、甘い衝撃で腰が砕けた。ズリズリと地面に擦れる貞操帯からは止め処なく淫汁が噴き漏れ、手すり代わりにつかんだ肉棒への圧迫も、自然と強く熱心なものに変化する。

「んはう、ぷちゅうう……ぢゅっ！　ぢゅりゆるっ、んぼっ、んへあああッッ！」

荒い息のこぼれる勢いそのままに舌上の肉棒を吸いこんで、滴る粘液の甘みに舌鼓を打

つ。壊れたゼンマイ人形の如く、腰が前後にカクカクと跳ね躍った。

「うひいっ！ も、もうもたねえ……」

ぶるっ……びくンッ！

(も……もうすぐ、くうん、欲しいっ早く、早くう！)

早くも切羽詰って口内のあちこちをぶつ暴れん棒の砲口を、舌先で転がして喉元に向けセツトさせる。脳にまで回った媚香のせいで、とつくに理性は解け墮ちていた。

握りこんだ二本の限界も近づいていると知ると、絡む指先の刺激をより強め、クチュクチュと先走りを絡めて亀頭を重点的に責め抜く。

「髪の毛のザラザラ感も、い、いいぜえっ。俺のにおいをたっぶりつけてあげますよおっ！」
肉の幹にぐるぐる巻きにされた黒髪の中に噴き漏れる粘り気に身震わせ、全身で獣欲の鼓動を甘受する。

「エロ女神様最高！」「待ちきれねえよ！」「溜まってんだ、何発でも出せるから……まず
はぶっかけてやるぜ！」

周りの下卑た視線も、情欲に溺れた乙女には快樂の種としか映らなくなった。臭く粘つく体液が今すぐにでも欲しくてたまらない。そのことだけが頭の中を埋め、子宮を啼かせて、連動する肛門をきつく締めさせる。

「うぐ！ く、くそっ」

ぐぼぢゅっ！ ぢゅぼぼ！ ぼぢゅんっ！ ばんばんつぶぼぼつぶぶうううッ！

「にゆりゆっ！ んんぶううう！ あはああっ！ おひりの穴めくれてへえっ、しゅごいのおほおおお！」

ムリムリと抜け出る肉幹に引きずられてめくれた肉粘膜は、なおも淫汁を接着剤代わりに牡の猛りにすがりつき。ひっきりない脈動を伝えられては、切ない衝動に子宮の奥まで貫かれ、舌を突き出し身悶える。

「ぐ……おおおっ！」

どぶるっ！ びぶっ！ びゅ、びゅぐびぢャッ！

「んへあ！ えぶ、んぼおっ……ぢゆりゆりゆ……んぐっ、ん、ほいひっ、いほおお！」
淫堕な女神の痴態に触発されたのか。キャンディーのようにねぶり続けて味のなくなつた亀頭が、前触れなく突然、舌上で震え、暴発した。

（ああ、熱くてくっさいの、き、きたああ！ 舌の上で、ごきゅっ……プルプル……躍つてりゆるおお♪）

むせ返りながら喉奥に滴つた多量の濁液を順次嚥下すると、甘く蕩けた粘り気に胃袋がタップと弾む。飲みきれなかつた濁液が口元からあふれたのを拭うように口内に押し戻し啜り飲む。

蜜を補充した股間も前後左右にみつともなく揺らいで、挟まる肉凶器からしきりに先走りを探取し続けた。

跳ね回る射精真つ最中の肉幹を丸めた舌で捕えて巻きつき、照準を合わせた肉先からの

子種汁を、喉でじかに受け止めながら。

「ひははっ盛った牝犬そのもんだあっ……くうッ！」

びゅびゅうっ……びぐっ！ どぶびゅぶるるるッ！

頭上の左右の手のひらからほぼ同時に、黒髪目掛けて飛び散ったザーメンの臭気を、ヒクリと跳ねた鼻腔が悦び勇んで吸入する。

「ひひ、綺麗な髪が真っ白になっちまって、おおう！」

どぶんっ！ びぢやあっ、びゅぷっびゅぐぐッ！

滴る濁液の粘り気に白く犯されていく黒髪の中でも、ドクリと震えて肉棒が子種汁を噴き上げた。

「ぷふう！ んぶあッ……きてえつもつとたくさんッ私の身体を汚してくれええええ！」

ぎゅちっ！ ぎゅぎゅウウウッ！

「ぐうっおおおおッ!!」

握り締めた左右の手の内で、肉棒が苦しいといわんばかりにビクビク飛び跳ね、粘り気の強い白濁シャワーを乙女の頭部に、鎧に、ドレスのそこかしこに浴びせかける。

（幸せえええ！ すごひっ、こんなの知らないッ！）

なぜ、こんなにも気持ちいいことを大神オーディンは教えてくださらなかったのだろう。「んぢゅぽっ……ちゅずっ、ずるるっ……くひいっ、いひやッあおおおッ……！」

腰砕けになつたはずの尻が角度を変え、腸肉のあちこちを暴発寸前の肉凶器で貫かせる。

（すごひいいっ！ 全身牡の臭い汁まみれでっ、絶対だめなのにいっ……許されないう、我慢しなきゃ……でも、でもおっ！ 股下も、お尻も、胸も幸せでたまらないのおお！）

ドク、ドクとすでに先走り汁をたっぷり吐き漏らしつつ、男は小太りの腹肉を乙女の尻肉にぶつけながら自動機械の如く腰を振るい続けていた。

「お、俺あケツ穴でも構わねえからよっ！ 俺のザーメンっ、尻の奥でしっかり受け止めてくれよなああ！」

ばぢゅっ！ ぢゅばんっぐぼぐぼぐぼぶぶぶッ！

「おひいいいいっ！ う、受け止めるっ！ 受け止めるからああっ、は、早くうっ！」
イキっぱなしで痙攣してしまつた腸肉が、それでもなお微細な振動で牡肉を締め上げ、酸欠状態の頭の中で、ひたすらに牡の射精を願ひ続けた。

「あぐ……っ、いくふうっ、まらあっ！ んぎゅッ……おっきいのきちやううううう！」

半ば意識を手放して、髪や頬から垂れてくる牡汁を懸命に舌尖ですくっては飲み下し。

ぷすうっ……。踏ん張る拍子に肛門から卑猥な水音が——まるで放屁のように漏れ出て、乙女の羞恥を逆撫でする。

「あひやつ、やああ、聞かないでッ、変な音聞かないでへええええええッッ！」

ぷすっ……。ぷびゅりゅっ！ 言葉と裏腹に腹に力をこめ、繰り返し擬似放屁と、さらに隙間から漏れ出た混濁液の粘着音までがアリーヤの被虐を煽り立て。

（恥ずかしいのいいのっ、エッチなお尻の穴、たまらなく、い、いひいいいっ！）

混濁する意識を媚葉が侵食し、ギチギチと目一杯締め上がった肉筒の奥底で――。

「ぐくううつ、出ずぞおおつ女神のケツマ○コおつ、く、くらいやがれえええ！」

どぐうううつ！ ぼびゅぶびゅぶツッ！ びゅぐツぶびゅるうううううううツッ！！
腹奥で、熱く粘ついた汚濁が弾けた。

ほぼ同時に、周囲で手淫に耽っていた連中の肉棒からも白濁のシャワーが、幾重にも重なって黴の鎧に降り注ぐ。

濃密な、牡の臭気が戦乙女の卑しい股穴を貫通する。

「へ、あつ、あへええああああ！ き、きたあつ、いつ、いぐのつ！ わらひいつ、イツ……いイツくぐううううううううう！！」

ぶしヤツツ！ ひと際強く、貞操帯の布地を通して吹き上がる潮が、牡の臭みの中に甘みを加え。止め処ない絶頂の果てに、全身の倦怠感と、底なしの肉の疼きとが連結して。

「め、女神様あ？ っち、目え剥いて失神してやがら」

「おうつ！ でもケツマ○コはまだギツチギチだ……」

(し、しあわせ、ええ……)

イキ続ける腰の震えに身を任せ、アリーヤの意識は快楽の海へと飛びこんでいった。

――三時間後。

「へ、へへ、またケツマ○コにドクドクつと……！！」



制止を試みたアリーヤの声は、突き入る肉棒の衝撃によつて嬌声へと変えられ、すべて徒勞に終わった。

「……俺のものになりたいか？」

「え、えええつ？ そ、それは……」

顔を寄せ、耳元でささやかれた甘言。思いもしなかつた優しい音色に、長いプロンドがなびくほど取り乱して、わずかに身体を後退させる。

黒髪の乙女の心に、動揺と哀しみが吹き荒れたのが、表情から読み取れた。ほんのわずか、妊娠という目に見える形で先を越されたことに対する溜飲が下がる。

「取り繕う必要はない。レイア……アリーヤよりも自分を抱いて欲しいのだろう？」

ごくりと喉が鳴るのを、期待に打ち弾む鼓動と共にレイアは聞きとめた。詭弁を見破られた恥じらいや落胆などは微塵もない。むしろ内心を汲み取ってもらえた悦びに悶え、紅眼を潤ませる。

「俺だけの奴隷になると誓うなら……これから一生お前を愛してやる」

「デュー、ク。本当……なのですか。本当に、私を、ああんつ……」

耳朶に吐息を吹きかけられる、それだけで腰が蕩けて碎けそうになつた。抱き寄せられて胸元へと忍んできた大きな手でドレスごと右乳を揉みしだかれ、幸せが恍惚と共にあふれてくる。

「う、うううつ……ああ、は、はああ……」

その間、黒髪の乙女へのピストンは中断されたまま。折角昂らされた膺が煩悶し続け、粘り気の強い蜜汁を涙代わりにトロトロと吐きこぼす。

うつむく金髪の乙女は、最後まで、頭上で浮かぶ悪魔の笑みに気づくことがなかった。

「デュー……クウ……あぁっ。私、わたしい」

そして魔将の言葉を肯定するように、蒼穹の戦乙女は男の腕の中へと身を寄せる。

まるで犬が主人にじゃれつくような甘えた仕草。だが語尾は決意を秘めた、静かで、ずしりと胸の奥まで響いてくる暗い響きを伴って。

歌うように、女神は墮落の言葉を吐きこぼす。

「誓います……。私は、蒼穹の戦乙女レイアはあ……生涯、身も心もデュークの、ご主人様だけの女になることを、誓いますう……！ あなたに、すべてを……捧げます……」

ベッドに転がされ魔将に組み伏せられながら。イキつばなしで引き摺れる股下の快楽も束の間忘れ。呆然と聞いたその言葉が「慈愛の女神」と呼ばれた目の乙女の口から放たれたのだと、すぐには気づけなかった。そうではない、と脳が理解することを拒んでいる。そんな黒髪の乙女を突き落とすために再度響く、艶と歓びと嫉妬にまみれた、澄んだ音色。ベッドの向こうで立ち尽くすレイアは、開放感からか満ち足りた表情をしていた。

「ごめんなさい……アリーヤ」

うつむいた金髪の乙女の頬を、涙が伝う。その懺悔が、アリーヤの目に焼きつく蒼穹の

戦乙女の最後の姿となった。

「レイアはあ……生涯をデュークに捧げるのおおっ」

戦乙女の中でも随一の慈愛と気高さを備えていた女神の口から、再び従属の言葉が紡がれる。同時に、彼女の身を包む蒼き鎧が急速に輝きを失い——そして。

びしッ……小さな音を立てて、ひび割れた。

「な……レイっ！ んぐっ、うあ、あぐうらんッッ！」

胎を内側から押し広げる肉棒の昂りに、魔将の歡喜をまざまざと知らされる。信じられぬ目の前の光景に早まる動悸が息苦しさを伝え、うねって牡肉を歡待する腔肉が、隨喜の涙を滴らせた。

ばきイッ——。とうとう、完全に輝きの失せた蒼き鎧が粉々に砕け、小さな無数の破片が床に散らばる。

「ふア……あああつ……」

わずかに身震いしたレイアの背に生え揃う純白のはずの両翼は、根元までが忌まわしき墮落の色——漆黒に染まりきっていた。

「な……ああ、あッ……レイ、アアアッ……！」

あつてはならぬ光景に瞳孔が見開き、深い絶望に目の奥が暗く眩む。

「ふあ、ああん……デュー、クうう……」

愛しい男の腕に抱かれ、その名を呼びながら喘ぐ白い裸体を、漆黒の翼が肩越しに覆う。

同時に砕けた鎧の破片から発生した黒の霧が、徐々に裸体と翼を包んで——新たな姿を現し始める。

もう失うものなど何もないと思っていた。禁忌の子を孕まされ、戦乙女としても、女神として生きる道も断たれた。今以上の絶望などないと、感じていた。

なのに、目の前で黒く染まり、淫堕に変わりゆくレイアの鎧を直視することができない。「よく見ておけアリーヤ……女神の墮ちる様を！」

吠えた男の声に押され仰ぎ見た金髪を、今まさに黒の兜が覆う。ビキニともボンデージともつかぬ高露出の鎧が黒い輝きでもってアリーヤの視界をさえぎった。

「くウ……ん、あはアアん……」

ひと際大きく身震いを残し、ゆっくりと持ち上がる金髪の女神の顔は——笑っていた。恍惚に歪む唇、淫蕩に溺れた紅い眼差し。そのどれも、アリーヤが知る金髪の女神のものとまるで違う。

「墮天の戦乙女。暗黒の戦乙女の誕生だ」

「ブラック……ヴァルキリー……」

それは古に伝わる、墮落した戦乙女の呼び名。

常に公平であるべき戦乙女が、持つてはならぬ感情。醜き私心に惑わされた時、その女神はすべての加護を失って魔界に下ると云う——。

男の言葉を信じるならば。目前で起こった光景からして信じぬわけにはいかなかった。

レイアはもう二度と元の戦乙女には戻れない、墮天の徴を負ったのだ。

「ばか、ものがあつ……」

白のシーツの上に遊ぶ黒髪に、自然と涙の雫が伝う。受胎という破滅的状况に己があることも一時忘れ、アリーヤは深い絶望と哀しみの淵に追いやられた。

「……泣かないで、アリーヤ。だつて私……はあん、身も、心もお、ご主人様のものになれたんですものお」

むぎゆううっ！ 素早く近づいたレイアの手ひらが絶妙な圧迫を右乳肌に加えてくる。甘い疼きが、同じ女であるがゆえに弱点を知り尽くした、柔らかな手つきによって搾り出されていく。

「ひぐあああ!?! や、やめつ、ひ！ んア……!」

妖艶なる微笑が清楚だった彼女の印象をがらりと差し替え。

「あん。ありがとうございますう、ご主人様あ。んちゆう!」

その淫蕩に微笑む唇は自ずから供物となることを望んで上向き、すぐさま魔将の唇が覆い被さり塞がった。

「ふぐ、うう……や、やあ、また膨らんでっ!? け、ケダモノオオ……ッツ!」

ぴちやぴちやと唾液が掻き混ざる音がつながる二つの口元から漏れる。その都度黒髪の乙女の胎を内から押し上げる肉の膨張と脈動が勢いを増し、すでに孕んでしまった肉穴を再度の悦楽に痺れさせてゆく。

「ああん、ちゃんとあとで私にも種付けしてくださいね……ちゅっ」

「淫欲」「恋慕」様々な鎖につながれて飼い主にじやれる犬を想起させられる。それでいて睦む恋人たちを見ているようでもあり、甘く狂おしい情景に、アリーヤの涙は止まらなくなつた。

「一緒に堕ちましょう……アリーヤ。うふふふう……」

黒い鎧がレイアの白い胸を寄せ上げ、ことさら強調するように漆黒に光り輝く。

「ふふ、戦士には不要な乳も、役に立てる日を待ち遠しがってパンパンに張っているぞ？ 生まれてくる子は、母乳で育ててやるといい……」

「んうう……ぐすつ……うう、なぜ……だ。なぜ……オーディン様あああああッ！」
腹をなでてくる魔将の言葉に妊娠という現実を再度突きつけられ、堕ちたレイアの微笑と乳を揉む淫猥な手つきとに、絶望と快楽をごちゃ混ぜに刻みこまれる。

——なぜ、我が身にばかり果て知れずの辛苦を、大神は負わせるのか。悲痛に満ちた間いかけは空の上の彼に決して届くことはない。

こらえようのない不信は、頑なゆえに脆く、脆いがゆえに頑なに屈服を拒んだ乙女の心と身体を瞬く間に決壊させた。

かつて最強と呼ばれた戦乙女の、泣きじやくる声が延々と室内に残響する。

「あらら。また泣かせちゃつた。くす……意外と泣き虫なんだね。アリーヤつてば」

「口キ。からかうものではありませんよ？ ふあんっ、ああ……すごいわあ。この部屋の、

なかあ……クン、クンクン……あはあん♪ エッチなにおいがこもってますうう」

さらに哀しみを助長する存在が二つ。墮ちた英知と、忌まわしき半神が、転移魔法で現れるなり好き放題なことを口走る。

「つぷあ。やあんつ。いくらフレイア様だって、ご主人様のキスは譲りませんからあつ」

「ふふ……ええ、いいわ。でも今はアリーヤを気持ちよくさせてあげましょう？ ねッ！」
ぎゅむつ！

「ひっぐ!! いひやあつ、いひいッ！」

「痛いのかい？ そんなはずないよね。キモチイイ、の間違いだろう？ ほらっ」

むぎゅううううつ！

「あはあおおおつ！ いひああつ！ やめつ、や……つ、ああぐツツ！ んぐううう！」

剥き出しの右乳房をフレイアの手、左をロキの手がそれぞれ根元からつかんで引き絞る。途端に黒髪の乙女の脳裏を白い衝撃が奔り抜け、とどめようのない甘い声と蜜が同時に上の口で漏れてしまう。

「ふ……ヌルついて、そんなに欲しいのか。ならば望み通り、また奥まで……！」

——ずぶうつ！ ごぶんツツ!!

追い打つように悪魔の肉棒が膣奥深く穿たれ、痺れるような愉悦と禁忌への誘惑でもって子宮を揺さぶる。

「んは、ああぐうう！ うぐつ、ぐすつ……や、あああつ！ もう、イヤああああつ！」

魔將の言葉に妊娠という現実を再度突きつけられ、堕ちたレイアの微笑と乳を揉む淫猥な手つきとに、絶望と快楽をごちゃ混ぜに刻みこまれる。やつと得られた再度のピストンの甘い衝撃にも、深い闇の縁に囚われた心は救われなかった。

「まるで子供だな……だが、それもまた一興」

膣道にまで振動となって響くぐずりに気をよくして、肉棒がゴシゴシと粘膜を削つていく。泣き顔に昂奮した牡の肉欲棒は、今や肉穴を引き裂かんばかりの幹周りで抉るように攻め入ってくる。

「はぐ……ッッ！ くあ、ああひいひいイイツ！ やめつ、もうやめてええええつ！」

凜々しさも神々しさもない。あるのはただ一つ、手折られる花の如き儚さ。ぶり返した肉の悦びに咽ぶ戦乙女の、しゃくりあげ、泣きじゃくる声が再び室内を震わせる。

「アリーヤつたら、かわいい。私とご主人様の赤ちゃんもきつとかわいいだろうなあ……
やんやあんっ」

激しい抽送に晒される結合部に魅入り、一人身勝手な未来を夢見た暗黒乙女がうつとりささやく。白い裸体を揺すり顔を寄せたレイアの唇が、ちゅうっ……とアリーヤの腫れた淫核へ吸いついてきた。

「しつかりと胎で受け止めろよ……！」

間髪入れず、また胎奥でぶぐりと膨れた肉の槍に、目一杯子宮口を刺し貫かれた。激しい抜き差しのたびに、レイアの唇で食まれたままの淫核が引き伸ばされて、爆ぜるほど満

ちた肉悦の烙印を子宮の芯まで刻みこまれる。

「ひぐううっ！ クリッ、やああ！ だ、だめッ……だめだめえええっ！ もう中はッ！ ひやあっ！ お願っ……ああんぐうううう！」

「もう、遅いッ……！」

再び重い腰を据えた肉棒が、子宮口をすり上げながら傘を広げた。にじみ出た濃厚な先走りが、小さな脈動のたび徐々にとろみと熱を帯びてゆく。

すでに孕んでいる子宮はなおも欲深に亀頭へと吸いつき、わずかに種の混じる粘性汁を飲みこんでしまう。

抵抗を諦めてしまった肉体は、噴き上げる淫熱に流されるがまま。ピストンに合わせ伸縮を繰り返すクリトリスを甘噛みされ、反射的に引き攀れた股間に黄色い液の架け橋がかかる。

「んぐうう！ は、ひいっ！ そ、そこ敏感すぎるうっ！ クッ、クリクリいっ！ ひあ
んっ、しないでっ、しなっ……きやふうああおとおお……！」

——びゅびゅっ、びぐんッ！ びゅ、びゅびゅう！

「ふあ！ ああん、もうアリーヤったら。イキながらお漏らしするなんて、はしたないんだああ。んぢゅ！ ぢゅぽんっ！ んっ、ぢゅうーっ！ ふあ……んくっ。んふふう」

顔面でじかに尿を受け止めて、怯むことなく金髪の乙女は濡れた唇を歪め淫蕩に笑う。なお肉棒の出入りする結合部へと押しついた唇は厳しい吸引でもって尿と蜜と先走りの混

合液を啜り、泣きじゃくる女神の心まで貫く鋭い愉悦を子宮目掛け叩きこんできた。

「んあおおおっ！ おううっ！ ひやあああつ！ の、飲んじやらつめえええええつ！
ひつ、や、ああああああ！」

しゃくりあげるたびに勝手に膣肉が引き締まる。逃げ場のない快樂の連鎖に、打ちのめされてただただ黒髪の乙女は涙した。

早く、この地獄のような時間が終わることだけを、もう信じる者のいない天に向けて祈りながら。ただ疲弊する心と身体に、禁忌の子という重荷まで抱え、黒髪の乙女は白濁まみれの意識を肉欲の渦へと投げこんでいく。

「んー……ぢゅっ！ もうご主人様に何回もイカされたのでしょうか？ 羨ましいなあ……
ああ、私もご主人様の赤ちゃん、欲しい。受精……したあいつ」

——がちイツ！

「ひッ、ぎあああああああつ！ はひッ！ イッ、いつひやあああううううッ！」
嫉妬に駆られた墮落乙女の歯が、浅く淫核を噛み潰した。視界が白に染まり、また絶頂に押し上げられ、つま先が反り返る。噴いた蜜が己の鎧にちりばめられ、鬱屈した肉欲ばかりが吹き荒れて。前のめりにラストスパートをかける魔将の身体の下で、腿が、腰が、股間が、そして子を宿した子宮が止め処なく打ち震える。

「さあて、それじゃボクらも……新しい肉奴隷を歓迎しようか？ んんッ……」
薄笑みをこぼしつつ左乳を揉むロキの極小のショーツから、すでに先走りドロドロの

亀頭が収まりきらず覗いていた。

「アリーヤ、キミのせいだよ？ キミがあんまり可愛く泣くからさ……我慢できなくて、ずっと物陰でシコシコしてたんだ。ボクが、あは……オナニーなんて久しぶりイ……」

空いた右手で己の逸物を握り、激しく上下に抜き立てる。顔の間近で行われる自慰行為の生々しさ、そして漂う、男の精とは決定的に違った甘い香りに。否応なく黒髪の乙女の青い瞳も吸いつけられてしまう。

「ではわたくしも……あはあん、見えるかしらアリーヤあ……」

片や、あろうことかはしたなく黒髪の乙女の顔面をまたぎ右足を高く掲げたフレイアの股間。淫蕩に熟れた肉の扉がまるで食虫花の如く蠢き、テラテラ濡れ輝く内粘膜を惜しげもなく晒す。

ぼたッ——。

「ん、ぶうッ!! ひ、やあああッ……!!」

かつての上官の愛液が、惚けてぼっかり開きつばなしのアリーヤの喉元へと滴り、口内粘膜に溶けこむように染み入った。口の中はおろか喉の奥までがカッと熱く火照り、股下でジュワリ、熱く爛れた蜜があふれる。

「わたくしのオシッコとロキのおちんぼ汁。あなたへの歓迎の証なのだから、ちゃんと浴びて飲んでくれるわね……？ わたくしたちの新しい妹。かわいい、アリーヤ」

(の、む……オシッコ、おちん、ぼじ……る……)

知らず知らず喉が鳴る。先刻飲まされたロキの小便と愛液の味わい。そして教えこまれた被虐の心が打ち震え、この上なく高みに達した、絶頂の味。今また鼻先と頭上で香る牝の体臭と、甘苦しいふたなりの体液のにじみ汁とに。吸い寄せられ、鼻がヒクヒクと蠢いて、たまらなく心が高鳴ってしまう。

「ああんっ、私もお。アリーヤと一緒に浴びますう」
がりッ——。

「ひぐううううっ！」

淫核がちぎれそうなほど強く嘯まれ、ズキズキと腰の奥まで痛痒が、愉悦を伴いずぶずぶと浸透する。また、果てて蜜をレイアの鼻先に噴いた。

魔将の肉棒が蜜汁で濡れ光りながら強烈な突きこみを続行する。それでまた、果てる。繰り返し、繰り返し、終わることのない肉悦の連鎖に囚われ。

「ひいつ、ああ！ ひつぎいうッ！ やあつ、も、お、やあらああああああ！」

今またレイアに向かいあつてのしかかられ、ただ涙する顔を見られぬよう伏せることしかできない己が、ひたすらに情けなく、呪わしい。

「ん、しょ……ほおら、アリーヤ。私のおっぱいとあなたのお乳。わたしのクリちゃんとおあなたの、歯型がついたクリちゃんキスしてるわあ。あ、あはああ……やあんっ、これ、いいイツ……！」

火照る肌と肌が触れあい、押しあい、密着してたがいの熱を共有する。ビキニ状のレイ

アの鎧はたやすく秘するはずの場所を露出させ、尖った乳首同士が潰しあう。

「はひやつ！ あつああああああ！ む、ねえつ、ひぐつ！ またッいぐウウ！」

トクトクと鳴る金髪の乙女の鼓動と淫蕩に歪む微笑を見つめながら果てれば、今度は湿り気を帯びた淫核同士が擦れて、ニツチャニチャ卑猥な音が響く。

「はあ……あうんつ。お手手、ぎゅつてつなぎましよう。ねえ、アリーヤあ……ん」

パチンツ——暗黒の戦乙女の魔力によってたやすく外れた鞭が床に転げ落ちる。頭の両脇に投げ出された両手にレイアの指が絡んできて、凶らずも手と手を取りあう形となり、心までもが搦め捕られていく錯覚に、黒髪の乙女の心は軋み、涙に暮れた。

「ふふ……いいよ。キミたち二人まとめて……んあああうつ！」

「ええ、わたくしたちの可愛い妹に、歓迎のお小水を、はああんつ！ 出るう……！」

ぶるつと震えたロキとフレイアが、それぞれの構えた歓迎の証を吐き出そうとしている。「では俺も、胎の子にしっかりとミルクを飲ませてやろう……！」

ずぶぢゅツツ！

「やはあああああああ！ あ——ツツ！ 中つ中はあああああ！ ひいううつ、も、イクのおおおおおついやああああああツツ!!」

——ぶしゅツツ！ びよるるるる！

男のたくましい肉棒に女の芯を揺るがされ、尿と蜜を同時に噴き漏らす。絶え間なく続く絶頂に喉はかれ、かれることなく蜜をこぼす膣肉はギュウギュウと、まるで愛しい男を

抱き締めるかのようにすがり、張りついた。

「あつたかあい……アリーヤのオシッコお。やあん、ご主人様、私のオマ○コも、お尻の穴も見て、弄つて、犯してえええ！」

己の手でずらしたビキニショーツからこぼれた尻穴も、濡れた蜜穴もすべてを晒し。密着した下腹部同士の間で跳ねる尿に感じ入りながら、レイアがフリフリ尻を振る。

「ひやあううつ、今つ、イツた、ばか、りいいつ！ 動かないでっ擦らなっ！ あへえあ
ああああーっ！」

びくっびくびくんッ！

真上に乗るレイアの振動が、ぴったり張りついた乳首とクリトリスから腰の芯まで伝わり、振り乱れる黒髪を白いシートに散らばらせて、アリーヤは再び絶頂に駆け上がった。

「ひうっ！ うっ！ うううううっ、ぐすっ……イクうううっ」

掠れた声がこだまする。もはや声を張り上げ絶叫する余力すらない。他の女たちの嬌声と、数人分の重みで大きく軋むベッドの鳴き声、そして己の内で吠える肉欲の唸りとに溺れ、沈んでいく理性を——力なく、手放してしまった。

「あはああっ……いい、顔してるよ、とてもいい……泣き顔っ……」

「ええ。見ているだけで、愛しさと心地良さであふれて、いつてしまえそう、あはあ！」

涙とよだれでぐちゃぐちゃの顔面に、迫り出したフレイアの股間からの愛液と、突きつけられたロキの肉棒よりの先走り汁が滴り、ますます涙に暮れる瞳を塗り潰してゆく。

「ああ、もつたいなあ。ペろっ。んーっちゅ！」

「んんーっ……んっ、んむう、やへ、へ、レイっ、アあんぷうう……！」

さらに淫靡に這いずるレイアの舌が、涙の辛さとよだれの粘り気に蜜液の甘さ、先走りの苦みを混ぜた粘性液をなめ取って、唇を重ね、口中へと流しこんできた。

「あ、ずるいなあ。ボクだつてまだしてないのに……ああ、アリーヤとキスうう」

不貞腐れたロキの口調は演技か、あるいは本気だったのか。口中を這いずる元同僚の舌に翻弄され、思考を真っ白に染められた黒髪の乙女には、わからない。

くすぐつたさと、グジュグジュに泡立つ粘液を塗りこまれる心地悪さが混然一体となつて、涙に暮れる乙女の心に新たな被虐を植えつけ、刻みこんでいった。

「ふ……ッッ！」

——ぢゅづごッッ!!

「あはうッッ！ あ——ッッ！ ひいうっ、いぐううう！ ンッ！ んんうううッッ！」

目一杯突かれた子宮口からにじみ漏れた子種の一部が、男のピストンに合わせて再び胎の中へと戻ってくる。まるで、すでに妊娠しているこの身を、もう一度孕ませたがっているかのように牡の種は熱く、再び子宮内粘膜に染みこんでいった。

熱く火照りを帯びた下腹部は、男の突きこみのたびに脈打ち、悶え、しきりに芽吹いたばかりの新たな生命の鼓動を告げてくる。

（私の、中に……うあつ、新しい、命が……ア！ 魔族の赤子、が……ああアア！）



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価・本体690円(税込)



全国書店で
好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を
牝奴隷に墮とす
新たな敵の登場!



全国書店で
好評発売中

少女天使の暴走が
平和な学園生活を破壊する!!
シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

呪詛喰らい師2

【小説・蒼井村正 / 挿絵・或十せねか】

思春期なアダム4

【小説・さかき傘 / 挿絵・天海雪江】

聖域の崩壊



全国書店で
好評発売中

男の子と女の子
二つの性の中で揺れ動く
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

オトミヨウ!
僕は男の巫女娘

【小説・大熊狸喜 / 挿絵・大空樹】



既刊LINEUP

- 仙獣字態戦姫 / プナガガ! ①~③
- ビルグリムメイデン ①~④
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①~④
- 呪詛喰らい師【コースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢 크리스 ①~③
- 無敵の短騎士がDMCに目覚めたようです
- 宇田海城学園 ブラックキャット



キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

ヴァルキリエ

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!